

学会ニュース

目次

・ 第30回大会および第31回大会について	1	
・ 近世ハプスブルク君主国の政治社会	岩崎 周一	2
・ 事務局より	5	

第30回大会および第31回大会について

今年度の第30回大会が、6月21日（土）、22日（日）に、大分大学・^{だんのほる}旦野原キャンパス（大分県大分市^{だんのほる}旦野原）で開かれました。開催校責任者は、松田聡会員でした。今回は5名の会員が自由論題で発表され、また共通論題「18世紀のオペラへ：コンテクストの側から」（コーディネーター：松田聡会員）では4名の方がご報告くださいました。また、小特集「^{やりのみず}「耶馬溪」変奏曲」（司会：高橋博巳会員）では、ゲストを2名お迎えし、活発な議論が行われました。さらにコンサート「16～18世紀のビウレラ／ギター音楽と声楽」も催され、大変多彩な内容で盛会のうちに終わりました。

来年度の第31回大会は、2009年6月中旬に多摩美術大学（東京都八王子市^{やりのみず}鐘水）で開かれる予定です。詳細は、次号の学会ニュースにおいてお伝えいたします。

近世ハプスブルク君主国の政治社会

岩崎 周一（一橋大学）

今回、思いがけなくも学会ニュースに寄稿をという依頼を受けた。現在おこなっている研究について自由に書いてくれればよいとの親切なお申し出であったが、それだけではいささか退屈なものになるのではないかと思ひ、会員の皆様の多くにとってあまりなじみがないであろう近世のハプスブルク君主国の政治社会史に関して、少し研究動向的な内容を絡めて含めて書いていこうと思う。何かしら参考になる点があれば幸いである。

私はこれまで、近世のハプスブルク君主国における「諸身分（等族）Stände, Estates」（身分制議会に出席する資格をもつ高位聖職者、貴族、都市などの中間的諸権力の集合体）の重要性に着目し、領邦下オーストリアLand Niederösterreichにおいて王権と諸身分が議会でおこなった折衝の分析を通し、同地の諸身分の国家観および領邦（地域）観、共属意識、そして国家形成への参与のありようについて研究を進めてきた。その結果、近世においてもハプスブルク君主国は「身分制的諸領邦の君主制的連合体eine monarchische Union von Ständestaaten」（オットー・ブルンナー）であり続けたこと、しかしその一方で諸身分は国家形成のプロセスに主体的かつ内在的に参与していたこと、また王権と諸身分の関係は二項対立的な把握で捉え切れるものではなく、相補的な性格を多分に含むものであったことが明らかになった。

ここで重要なのは、諸身分の中核をなした高位貴族層の活動領域が、皇帝の宮廷から君主国の他領邦さらにはその外部にまで及ぶ、超域的にして多元的なものであったことである。彼らは地域に根ざした中間的自立権力であった一方、中央における国家運営の担い手でもあった。このため、私はこうした高位貴族層の動向に注目することを通し、近世ハプスブルク君主国における王権と中間的諸権力に関する諸問題を、両者を複合的に捉える視座から、政治社会というより大きく柔軟な枠組みのもとで考察する必要があると考えるに至った。この「政治社会」というフレームワークはいうまでもなくイギリス史の近藤和彦氏の提唱に示唆を受けたもので、近代的な意味における「国家」や「(市民)社会」が近世史研究には利用困難な概念であることと、政治を主たる対象とするとはいえ、伝統的な「国制史」とは一線を画したいという思いから採用したものである。

なおオーストリアないし近世ハプスブルク君主国史研究の場においても、往年の「国制史」に見受けられたような、国家と統治に関する諸問題を大所高所から重厚に論じるスタイルはもはや過去のものとなり、より柔軟かつ多彩な関心およびアプローチに基づく政治社会研究が根つきつつある。宮廷に対する近年の急速な関心の高まりはその好例であり、儀礼や表象に関する研究も活発化しつつある（ただし「政治社会politische Gesellschaft」という用語はまだ浸透していない）。史料自体はきわめて豊富に残されているから、今後は

めざましく研究が進展していくことが予想される。

ただしこうした動向は、いまだいわゆる「啓蒙絶対主義」期（1740～90年）には全体として及んでいない。また地域史研究の多くは当該地域の独自性を強調するにとどまり、中央あるいは他の内外の諸地域との越境的関係や相互作用をも視野に入れての研究は今日ようやく緒についたばかりであり、今後の進展が望まれるところである。異なる文化的出自を有し異なる利害関心を抱く諸々の個人および社会集団が、内外の諸状況をにらみつつ多彩な形で関係しあう中で生じるダイナミズムに注目し、近世後期の政治社会のありようについて問い直すことは、今日の近世ハプスブルク君主国に関する政治史研究が抱える最重要課題の一つであろう。

また、日本においては明治以来、国家形成の模範としてもっばらプロイセンに注目が集まった一方、封建的遺制が広範に残存した老大国とみなされたハプスブルク君主国は、研究者の関心を従来さほど引いてこなかった。そしてその数少ない日本のハプスブルク君主国史研究者の関心はこれまで19世紀（後半）以降に集中しており、近世についての研究の蓄積は皆無とは言わないまでも、きわめて乏しいと言わざるを得ない。しかし近世が中世とも近代とも異なる固有の特質をもった時期であることが広範に認識され、その研究が活況を呈するようになった日本の西洋史研究の現状を鑑みると、立ち遅れが目立つ近世ハプスブルク史研究を進展させる必要性は、今日とみに高まっていると思われる。

さて私個人の今後の研究に関しては、形成されゆくハプスブルク君主国の統合の中心であった皇帝の宮廷Kaiserhofと、下オーストリアの2つをフィールドとしていく所存である。過日大会にて報告させていただいた金羊毛騎士団についての研究は、王権と中間的諸権力が直接的に関係する場としての騎士団のありように関心を抱いたところから手掛けたものである。また下オーストリアをこれまでに引き続き選んだのは、この地域が「帝都」ウィーンを内包しており、その関係から中央としての性質をも有したことから、中央と地域の諸状況を複合的に把握する上で好ましいと考えたことによる。また検討時期についてはこれまでのそれを前後に拡大し、三十年戦争が終結した1648年から、革命の年である1848年までとする予定である。これはハプスブルク君主国の場合、1648年以降に成立した体制が原則としてその後ほぼ200年にわたって存続したためである（たとえば諸身分が解体されるのも1848年のことである）。また、あえてこうした（狭義の）近代をまたいだ時代区分を採用することにより、1800年前後に生じた諸々の変化を、連続性という文脈において検討することができるのではないかと考えている。

そして高位貴族層の言説および実際の活動の分析に関しては、彼らが遺した日記、書簡、覚書などを利用し、支配のありようと人的社会的ネットワークの連関に注目して、現在研究を進めている。しかしここで厄介なのが、当時のハプスブルク家および高位貴族が、ドイツ語と同じくらいフランス語を多く用いて文章を書いていることである。こうした状況からすれば早急にフランス語の習得に邁進しなければならないところであるが、いまだ歴史研究者として身を立てていけるか定かならぬ現状にあって、二の足を踏んでいるという

のが正直なところである。

閑話休題。ともあれ、「地域においては宮廷を、宮廷においては地域を代表しつつ国家の重要な官職を独占した（高位）貴族」（R・J・W・エヴァンズ）の活動とその特質を探究することは、メッテルニヒが「貴族制的君主国Aristokratische Monarchie」と表現したほどに高位貴族の社会的重要性が高く保持された近世および近代のハプスブルク君主国の政治社会を理解する上で、大きな意味をもつと思われる。それはまた従来市民社会の発展と密接に関連して理解されてきた近代ヨーロッパの政治文化をめぐる議論に対しても、新たな刺激をもたらさうるのではないだろうか。

事務局より

「西洋近代思想と永井文庫 ー最大多数の最大幸福を求めてー」展のお知らせ

名古屋大学では、名古屋大学附属図書館への「永井文庫」寄贈を機に、特別展を開催し、あわせて講演会も行います。ぜひご来場ください。

2008年秋季特別展 「西洋近代思想と永井文庫 ー最大多数の最大幸福を求めてー」

日時：2008年10月6日（月）～10月27日（月）9:30～17:00

（月～土に開室、日・祝日は閉室です。ご注意下さい。）

場所：名古屋大学附属図書館(中央図書館)4階展示室ほか

講演会

日時：2008年10月18日（土）14:00-17:00

場所：名古屋大学附属図書館(中央図書館)5階多目的室

講師：土方直史氏（中央大学名誉教授）

「ベンサムからオウエンへー功利主義・民主主義・協同主義ー」

柳田芳伸氏（長崎県立大学教授）

「永井文庫の特徴とその学術的意義」

永井義雄氏（名古屋大学名誉教授）

「本を通して出会った人たち」

コメンテーター：深貝保則氏（横浜国立大学教授）

※詳細は右URLをご覧ください。 <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/index.html>

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、本年度までの会費未納入の方へ振り込み用紙を同封させていただきます。前回の学会ニュースでもお知らせ致しましたが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくお願ひいたします。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では、学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一(常任幹事・年報担当)、井田尚(常任幹事)、伊東貴之(常任幹事)、岩佐愛(常任幹事、年報・書評担当)、王寺賢太、小田部胤久(代表幹事)、笠原賢介(常任幹事、会計担当)、金沢美知子(常任幹事)、川島慶子、小穴晶子(常任幹事、年報・業績覧担当)、高橋博巳(東アジア交流担当)、寺田元一、長尾伸一、中山智子、馬場朗(常任幹事、庶務・学会ニュース担当)、堀田誠三、増田真(国際幹事)

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第58号 2008年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室内

e-mail: jsecs@nifty.com

fax: 03-5841-8958

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>